

それでも、五郎にとって日新館での勉強はたのしいものでした。今までのおくれをとりもどそうと、ひたむきに勉強しました。希望がわいてきました。そのやさき、世話になつていた小林家の都合で、五郎は勉強を中断してまた落の沢の一軒家に帰るはめになつてしまいました。真冬の寒風が下げてある入口のむしろをあおつて吹き込んでくる家の中での、乞食のような生活にまたもどりました。父も兄も兄嫁あによめも五郎も、寒さに身をふるわせながら繩なわをなう日が続きました。五郎は心の中からこみあげてくるくやしさをどうすることもできませんでした。(なぜこれほどまでの仕打ちしうちにあわねばならないのでしょうか。こんなことなら、母上や姉妹たちと一緒に自害していけばよかつた)とも思いました。炉ろの火を見つめていると、急に火の海につつまれた若松城下のことが目にかびました。白い着物に身をつつんで自害した母のことが思い出されて、涙がほほを流れました。誰も、もくもくと繩をなうだけでした。